

# 第 17 回英語語法文法セミナー

テーマ「日本語訳では理解できない英語のしくみ」

司会・講師 西田光一（山口県立大学）

講師 辻本智子（大阪工業大学）

講師 松原史典（京都女子大学）

講師 盛田有貴（奈良女子大学）

日時： 令和 3 年（2021 年）8 月 2 日（月）13:30～17:30

会場： オンラインで開催

参加費： 無料

プログラム：

13:30～13:40 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明

13:40～14:20 辻本智子（大阪工業大学）

「句動詞の表現力」

14:20～15:00 松原史典（京都女子大学）

「倒置現象の意味と形式」

15:00～15:10 -----休憩-----

15:10～15:50 盛田有貴（奈良女子大学）

「ことばや思考の引用を含む現象に隠れた意味と機能」

15:50～16:30 西田光一（山口県立大学）

「英語の照応表現の選択のバリエーション」

16:30～16:45 -----休憩-----

16:45～17:25 質疑応答

17:30 セミナー終了

---

※ 本セミナーは、学会会員以外の方を含めどなたでも参加できます。参加ご希望の方は英語語法文法学会ウェブサイト (<http://segu.sakura.ne.jp/index.php>) にアクセスし、申込フォームに必要事項を記入して下さい（6 月上旬に詳細を同サイトに掲載します）。申込み締め切りは令和 3 年 7 月 24 日（土）です。お申込みいただいた方にアクセスに必要な情報をお送りいたします。ウェブ会議アプリケーションの参加定員に達し次第募集を締め切ります。必要な方にはセミナー受講証明書を発行いたします。

## 各講師の発表概要

英語の照応表現の選択のバリエーション

西田光一 (山口県立大学)

本セミナーでは英語の語法文法で、そのままでは日本語に訳すことができないものに焦点をあてる。例えば、句動詞は日本語訳による理解から遠いものの代表である。確かにイディオムとして、**put off** は「延期する」、**take off** は「離陸する」、**turn off** は「消す」のように日本語訳を当てるのは間違いではない。しかし、これらの訳語は当該句動詞の意味の範囲を十全に言い表しておらず、これらの句動詞で **off** が付くことの意味の共通性を反映してもいない。英語を英語で理解する工夫が求められる。

英語の照応表現も、日本語には **he**, **she** といった人称代名詞や定冠詞の **the** に相当する単語がなく、日本語に直訳されない。ここでは照応表現と英文のジャンルの関係を解説する。ジャンル限定的な照応表現として、(i) ファッション誌でよく使われ、親密な異性のパートナーを表す先行詞のない 3 人称代名詞、(ii) スポーツ記事で特徴的に使われる記述内容が豊かな定名詞句、(iii) 伝記など主人公が 1 人に決まった文章に生じ、主人公の属性を一般化して表す不定名詞句、(iv) 報道文で前の段落を要約する定名詞句を具体的に議論し、単純な日本語訳では理解が難しい理由と、そのうえで理解に届く方法を示す。(iv)の例では、下記の新聞記事で下線部の **the talks** のように段落が次に移ったところに生じる定名詞句は、そのままでは対応する日本語がない。

The American aerospace giant Boeing is eagerly pursuing a partnership with the Brazilian jet maker Embraer as part of a global battle with its European rival, Airbus.

But the talks, which moved into high gear late last year, are advancing at a politically fraught time in Brazil, ....

*The New York Times International Edition, Wednesday, February 7, 2018.*

確かに、**the talks** がボーイング社とエンブラエル社間の協議を表すと理解できても、日本語では「その協議」のような単純な名詞句には訳せず、せめて「両社間の協議」といった語句を補う必要がある。英語の定名詞句には、単純な形式で先行文脈を要約する機能を担うものがあるが、それに対応する名詞句が日本語にはない。

このような事例を基に、4 人の講師陣が英語の英語らしさを解説し、各参加者が中学高校の英語の授業で実際に活用できる内容とする。当日のプログラムでは、対象とする事例が語句のレベルから文脈へと広がるように 4 つの発表を並べてある。

## 句動詞の表現力

辻本智子 (大阪工業大学)

英語句動詞について、学習者が戸惑う主な要因はその多義性だろう。**run** (走る) と **out** (外に) から成る **run out** が、なぜ「(物などが) 不足する」という意味になるのか。**bring** (持ってくる) と **out** (外に) から成る **bring out** が、なぜ「(事実などを) 明らかにする」という意味をもつのか。よくわからないまま、テストで点を獲得するために「ただただ暗記する」ことになる。だが理由もわからないのに暗記するには限界があり、たいていの人には句動詞が嫌いになってしまう。本発表では、こうした句動詞の負の側面を逆手にとり、句動詞の表現力にフォーカスしてみたい。

たとえば、**take off** (離陸する) は **depart** とほぼ同義とされる。もちろん辞書的な定義ではそうなるが、**depart** にはない表現力が **take off** にはある。基本動詞 **take** と **off** のもつ「空間のイメージ」がそれだ。**take off** は **depart** と同じ「旅立つ、出発する」という意味を伝達するだけではない。**take** の「物が移動する」というイメージと、**off** の「物がある場所から離れている」というイメージも同時に表現する。こうしたイメージを訳出することはほぼ不可能だが、空間的イメージの想起が英語句動詞の豊かな表現力の源であり、句動詞が「英語らしい」といわれる所以でもある。

本発表では、句動詞の構成要素となる不変化詞 (**particle**) のうち **out** を含む句動詞を取り上げ、まず **out** の空間的イメージを解説する。シンプルと思われる **out** にも、大別して視点が外にあるタイプ (a) と、内にあるタイプ (b) の 2 種類ある。



動詞と組み合わせることで **out** の空間的イメージはどのような影響を受けるのか、**take out, bring out, put out, go out, find out, run out, turn out** などの句動詞をひとつひとつ検証しつつ考えていく。認知言語学の成果を採り入れつつ、具体例を挙げながらわかりやすく解説していきたい。

## 倒置現象の意味と形式

松原史典 (京都女子大学)

言語使用において大切なことは、自分が伝えたい意味内容をどのような形式で表現したらいいのか、逆に言えば、複数ある形式の候補のうち、どの形式が、自分が伝えたい意味内容にぴったり合っているのかを正しく判断することである。そのためには、それぞれの形式が、実際どのような場面で使用され、話者・主語のどのような感情や想いを表すのかを正確に理解することが必要である。

本発表では、主語と動詞/助動詞が入れ替わる倒置現象を扱う。倒置には、義務的に起こる場合と随意的に起こる場合があり、前者を文法的倒置といい、後者を文体的倒置という。たとえば、(1a-b)の **yes-no** 疑問文に見られる倒置は文法的倒置であり、倒置が起こらなければ、読み手はこれらの文が疑問文であると解釈できない。

- (1) a. Are you a student of physics?  
b. Can you give me a hand?

一方、(2a-e) は文体的倒置の例であり、文中のある要素をより重要な情報（より新しい情報）として強調するために倒置が起こる。本発表では、こうした文体的倒置の倒置現象のメカニズムを明らかにし、それぞれの倒置現象の文法的・意味的類似点と相違点を情報構造の観点から考え、どのような意味的・文法的制約が関与しているのかを明らかにしたい。

- (2) a. "I don't believe in ghosts," said Ruth. <引用句倒置>  
b. Into the medical room walked John. <場所句倒置>  
c. More surprising was his behavior at table. <比較形容詞句倒置>  
d. Sitting on the sofa was a young lady. <分詞句倒置>  
e. Never will she join our golf club. <否定倒置>

特に (2a) の引用句倒置と (2b) の場所句倒置に焦点をあて、両者の意味的・文法的特徴を考察する。

わたしたちは相手に何かを伝えようとするとき、他者のことばや思考を引用することがある。以下の例は、中学校や高等学校ではそれぞれ直接話法 (= (2))、間接話法 (= (3))として学習される。学校での試験の解答のように両者の違いを際立たせた訳出をすると以下のように書き表すことができる。

- (1) John: I finally finished my dissertation.
- (2) Mary: John said, "I finally finished my dissertation."  
(ジョンは「ついに学位論文を書き終えた」と言った。)
- (3) Mary: John said that he had finally finished his dissertation.  
(ジョンはついに学位論文書き終えたと言った。)

(2)と(3)はいずれも(1)の John の発話の内容の引用であり、その内容は John 自身が発話したものであるということが動詞 **said** から読み取れる。(2)と(3)の文を日本語に訳出する際、①ジョンが論文を書き終えたという内容と②ジョン自身がその発話の内容を言ったことが共通して訳出される。一方、以下の(4)の例では、(2)や(3)と同じ発話の引用であるにもかかわらず、日本語への訳出では、発話の内容の引用に加え、引用された内容に対する話し手 Mary の心的態度(「ですね」、「だって」)が表われる。

- (4) Mary: You finally finished your dissertation. Congratulations!  
(あなた) ついに論文を書き終えたのですね。おめでとうございます。  
(?? (あなた) ついに論文を書き終えた。おめでとうございます。)
- (5) Mary: He finally finished his dissertation. That's wonderful.  
(彼は) ついに論文を書き終えたんだって。素晴らしいね。  
(? (彼は) ついに論文を書き終えた。素晴らしいね。)

(4)と(5)それぞれに対する 2 つの日本語訳を比較すると、話し手の態度の訳出を含まない下段の日本語訳は上段と比べ、不自然に感じられる。(2), (3), (4)はいずれも発話や思考を引用しているにもかかわらず、このような訳出の違いはなぜ起こるのか。その違いの背景にあるしくみについて簡単な例を用いながら説明を試みる。